

## 優しさは同情の延長ではなく…

——「死」の学びを通して感じたこと——

若林 一美

立教大学のなかで、“Death”や“Grief”というテーマを介在させながら、学生と共に学び合う機会を与えられてから、ちょうど今年で10年になる。

1989年に、「近代の社会と文化」を担当し、その時には『死生観への挑戦』という直接的に「死」という文字を使ったサブタイトルをつけたが、それ以外は「成人教育」、「教育と福祉」という講座のなかで、“Death Study”という視点を導入しつつ、講義を行っている。

現在、私が担当している「教育と福祉」及び大学院の「教育学演習」を中心に雑感を含めて、ふりかえってみたいと思う。

はじめて「死」と銘つけた講座を担当した時のこと、教室まで案内して下さった方は、「若い子が死など関心があるのだろうか。学生が集まるのだろうか」としきりに心配して下さっていた。私も一体どの位の人がどういう関心を持って集まるのか想像もつかぬまま8号館に向かった。1階の教室のあたりに学生があふれていて、結局その周辺にいる約500人が、受講を希望している学生だとわかったのである。そ

れから数回は、教壇やピアノの椅子のあたりにも学生に座ってもらい、群集にとり囲まれるような状況で、授業がスタートした。その後、5号館の広い教室に移り、学生も減ったのだが、たしかその年のレポート提出者は、390名程で、段ボールいくつかに分散されて、我が家に送られてきた。

この年のことは、今だに私のなかに「痛み」として残っている。アメリカから1985年にもどり、大学などで講義を始めた頃であったために、授業の運営方法が未熟だった、ということもあるかもしれないが、それ以上に「死」などという、非常にデリケートなテーマを、お互い同士の顔が見えないような状況のなかで1年間むき合わなければならなかったことが主たる原因であった、と思われる。アメリカのミネソタ大学社会学部「死の教育と研究」センターに研究員として2年あまり籍をおいていた時、“Sociology of Death”, “Funeral Science”等いくつかの学部レベルの授業を聴講していたのだが、そのような時、担当教官は講座のはじめに「授業はTherapy Groupではないから、個人的な問題

がある人は、個別的に相談にくるように」といったことを繰り返していた。本人が意識しているか、いないかにかかわらず、「死」や「悲しみ」について学んでみようかと思う学生の動機の中には、「何か私的」な動機があることが少なくない、という認識にたつてのことだったのだと思う。日本に比べて、授業中の話し合いや、専攻を同じくする大学院の学生を含めての指導教官との面談の機会なども、アメリカの方が多く思うのだが、とくに死に関する講座では、学生の内在している動機も含めて、個別的な対応が大切にされていたように思う。

「死生観への挑戦」という講座には、大学2年生を中心にした学生がいたのだが、学期末のレポートの最後に、こんな文を書いていた学生もいる。

「ぼくたちはいつか死ぬ。「死」ほど確実なものはないと思う。それに対して「生」は見えにくいし、とてもあいまいな感じがする。でもぼくは、そのあいまいな「生」を信じていきたいと思っている」

大学4年生の彼には、進行性の病気を持つ兄がいて、幾度か生死の境を行き来する姿をみていた。その兄の病状が今はおちつき、明るいきざしがみえはじめている、というなかで、祈りにも近い思いで、彼はレポートの最後にこの文章を書いたのではないかと思う。そして彼は、4年間この大学にいたが、だれにも兄のことを話せなかった、とも記していた。

毎回の出席者が、平均すれば400人位という教室のなかで、そこにいる学生がどんな思いで座っているのか、顔のある存在としてお互い同士がむきあうことは不可能に近かった。

学生の動機を知りたいと思い、開講からまもない頃に、「あなたにとって死とは何か」という質問をしたことがある。その答えは教室のなかで当事者の発言という形で共有することはできず、書いてもらうことになったのだが、大多数は、「我々のように若く健康な世代にとって、もっとも遠くにあるもの」といった感想であった。しかしなかには、先の青年のように自らの体験にひきつけたものも含まれていた。

「11歳の時に母が死にました。今日、この死という言葉のついた講座をとったのも、私の生き方、考え方……すべての根底に、母の死があるからだと思っています。その意味では、死が私にとって、もっとも身近なもの、ということになるのかもしれませんが」

ひとつの教室のなか、ほぼ同じ年齢の青年の死についてのイメージには、ずいぶん大きな隔りがある。

「死が無縁である」ということを、「我々世代」という複数の主語を使って断定した青年のとなりに、いつも死のかげをひきずっているという思いを抱いている女子学生が座っていたかもしれない。どちらの答えが正しく、間違っているということではなく、死は結局その人にとっての死ということでは、考えたり、語れないものだと思

う。

「死」を学ぶとは、良い死に方や苦しくない死に方を学んでいくことではないのだ。

例えば、4年間、大学のキャンパスで顔を合わせながら、重篤な病気を抱える兄の存在を、だれにも話せぬまま卒業していこうとする青年がいること。「死は暗くて陰気だからいやだ」と断定する自分の心のなかには、死に対するどのようなイメージがあり、どうしてそれが形成されてきているのか。また「死とは無縁のもの」という仲間に囲まれ、親の死というような体験を抱えた人は個別の感情として、悲しみや苦しみをだれにも知らせず、自分だけのものとしてひきうけなければいけないのだろうか。

等々、「死」に象徴されるようなとなく、現在の社会のなかでは、意識的にも無意識的にも避けられてきた事象を見直していくことが、「死を学ぶ」ということに他ならない。

5年前から担当している「教育と福祉」や演習のなかでは、「人が人を支える」といった意味合いについて、シンボリックな意味での「死」という視座からの問い直しを行っている。教室のなかにゲスト・スピーカーに来ていただいたり、記録ビデオやホスピスの見学など、限られた時間のなかではあるが、できるだけ「現実の姿」に触れることを通しての学ぶ機会ももつようにしている。これまでミネソタ大学の「死の教育と研究センター」所長であ

るロバート・フルトン教授やサンフランシスコ大学看護学部教授で、小児がんの子どものホームケアを始め、CHI（子どものホスピス協会）会長であるアイダ・マーチンソンなど海外からの演者にも来ていただいた。その他、がんと闘病中の男性、子どもを亡くした親、「がんの子どもを守る会」のソーシャル・ワーカー、「在宅看護研究センター」看護婦といった方たちや、不登校を体験した大学院の学生が発案者となって「不登校、いじめ、摂食障害、ひきこもり」といったことについて、話し合いを企画したこともある。

ゲストの方たちをおよびする時は、受講生だけに限定せず、教職員の方たちや学外の社会教育、福祉関係の人たち、体験者の人たちにも参加していただき、年代や立ち場を越えた意見や体験を共有させていただくことが多い。

知識を習得することや知ることが、かならずしも人間理解に直結するものではないと思うのだが、学生たちの感想や反応をみると、誕生から死に至る様々な局面に実体験を通してかかわることが少なくなっているように思う。

以前、高齢化をテーマに在宅で介護をしている看護職の人が、実際の看護場面のスライドを使いながら説明してくれたのだが、じょく創の写真がうつると、何人かの女子学生が気分が悪くなって席をはずしてしまったこともある。その後全員から感想文を提出してもらったが、あるひとりの学生は、「現在祖母が入院中で、母が毎日看病

にいつている。私もときおり病院に行くのだが、そのような時母は、床ズレができる大変だから、と言いながら、私に寝がえりやマッサージを手伝うようにいう。私はこれまで、床ズレは靴ズレのすこしひどい程度のものであろうとしか思っていなかったのに、祖母のマッサージも適当にしかやってくれていなかった。しかし今日スライドをみて、床ズレはひどくなると骨にまで至り、いのちすらちぢめてしまうということを知った。

これまでのことを思うと、祖母に悪くて涙がでてきてしまった。今度病院に行ったらおばあちゃんにやさしくし、母の手伝いを真剣にやってくれようと思う」

と書いている。学生自身にとっても学びであったが、それはおとなの世代にも示唆的なことである。

「今どき」の若い者は、やさしくないのではなく、知らないということを知ることができる。これまでは生活者の知恵として伝達されていたことがとぎれてしまっていること、伝える努力をおこたってきたことなども浮び上がってくる。こういった学生の感想は、ゲストにも手渡され、それを読んだゲストが再び学生たちに感想を返してくれることもある。

お互い同士が、いかに「知らない」かをきっかけにして、新しい関係性がひらかれることもあるような気がする。

1995年11月には、子どもを亡くした親の会である「ちいさな風の会」のメ

ンバー、阿部ヒロ子さんが子どもの死を通して感じていることを教室のなかで話して下さった。彼女の一人娘、智美さんは高校の部活中「熱中症」という原因でいのちをおとしている。もし生きていれば、教室にいる学生たちと同じ年頃、教壇の上に、智美さんの写真をたてて話しが始まった。この時の学生たちの感想を抜すいして紹介する。

N・K (教育3)

阿部さんのお話はとても心に残りました。他界された娘さんが、私たちと同年齢に近いせいかな、阿部さんがもし私の母の立場だったらなどと考えたりもしました。教育学を学ぶ学生としても様々なことを教えて頂いたように思えます。それは、私の学んでいる学問が学問で終わってしまっていて、生活者の視点が非常に欠けていることを改めて実感しました。何か生活と学ぶことの間には「すき間」があるような、雲の上から下方を傍観しているような、そんな印象すら持ちました。阿部さんや近頃では川田龍平さんなどもそうですが、最小単位の人が少しずつ運動を重ねることが、人の心をなんらかの形で動かし、力になってゆくのかと。

E・M (教育2)

始めに私がしなければならぬことは反省することだった。子供を亡くした親の会である「ちいさな風の会」の話を若林先生が初めてなさった時、正直なところ「えっ？」という感じだっ

たのだ。大きな悲しみを抱えている人々に対して大変思慮の浅い考え方も知れないのだが、「子供を亡くした悲しみを何年も何年も語り合うのはポジティブではないな」と思っていたのである。

悲しみとはすぐ忘れるべきもの一。これまで私はそう考えてきた。実際これまでの人生の中に「悲しみ」と呼べるものがいくつかあったけれど（人の死とはまた別のことだからかも知れないのだが）時間がたち、時がその悲しみを風化させるのを待っていた。本当に親しい人には自分が悲しみを語ることもあったが、大方“平気な”ふりをしていた。

阿部さんをはじめ「ちいさな風の会」のメンバーは語ることで悲しみをわかちあい、心の中で亡くなった子供を成長させている。私は阿部さんの話で親の子に対する愛情を強く感じる事ができたし、人と接していく上では人間の感情の殻である「悲しみ」を本当に理解しあうことで信頼関係が築かれていくと言っているのではないかと感じる事ができた。そして「ちいさな風の会」というものの存在に疑問符を投げかけたりはもうしない。語ることでいやされるならばいつまでも語り、私たちは悲しみに耳を傾けるべきなのだ。

A・S（教育2）

とても衝撃的であった。実際に実の子を亡くされた母親の例えようのない

悲しみ、苦しみ、そして愛情の深さ、その愛によるものすごい力（power）を前に、私は皮肉なことに、生きていくことの喜びを感じ、同時に、私に関わる全ての人に感謝の気持ちを感じずにはいられなかった。

私が一番印象に残ったところは、精神的に裁判に取り組む阿部さんにむかい、御主人が「早く普通の主婦に戻ってくれ」と言われたという話を私は聞き流すことができなかった。ここにまた一人の人間の“死”の重み、深さを感じるのである。御主人とて娘を亡くし、同じようにつらく、悲しく、苦しんでいらしたのだと思う。残された人間は普通に暮らさざるを得ない。娘さんの“死”をめぐる、家族の間にも様々な問題があったに違いない。同じ悲しみ、苦しみ、いきどおりを抱えていてもその処理の仕方、それをどこに持っていくかは家族とて違うのである。

阿部さんは今後もこの活動を続けていかれるのでしょうか。その悲しみの大きさは小さくならなくとも、活動を通じ、多くの人々の優しさに触れ、その喜びが悲しみを覆ってくれるのではないのでしょうか。

N・K（英米3）

私はまだ子を思う親の気持ちはわからないのですが、母は常日頃「子供を産んだことが人生の宝だ」と言っていて、「私のような娘でもそれでも幸せなのか」ときいても「いい娘だと思っている」と答えます。私はそれを聞く

たびに母に申し訳ない気になっているのですが、母親とは子供のことをそんな風に思っていてくれるのだと思います。

#### K・M (教育2)

将来教師を目指す一人として、阿部さんの学校に対する怒りや子供の命の大切さを、正面からまじめに聞かせていただいた。正直な感想としては、第一に、教師になることが怖くなった、ということである。自分の過去の生活の積み重ねから形成された“価値観”が、学校という公の場で、どれ程、認められるのだろうか、十人十色の世の中で、一人の教師が背負う生徒ひとりひとりの命の重さ、個性を尊重することに十分配慮できるのだろうか。少なからず、不安と恐怖を感じた。

阿部さんは、娘さんを亡くした後に再び同じ事故で学校が一人の死を招いたことに対し、自分の声の小ささを悔やんでおられた。阿部さんのお話する姿を見ていて、“悲しみ”はこれ程までに人を強くするものなのだ、とつくづく感じさせられた。悲しみは、その状況に置かれた人でなければ同じように辛く感じられないだろう、とは前々から思っていたが、だからこそ、阿部さんのように、二度と同じ悲しみを生まないために自ら声をあげて事故を発生させまいと訴え歩く姿は多大に評価すべきものであると思う。

阿部さんの悲しみは確かに大きなものであろうが、そのお話を聞いていた

私自身も涙が止まらなかったことを考えると、一人の命の尊さ、一人の死が訴えていることははかり知れないし、だからこそ、悲しみを忘れようとするのではなく、自ら認め、消化し、前向きに死を価値あるものとして学ばなければならないと思った。泣き寝入りしては何も改善されないどころか、悲しみさえも無駄になってしまうのだと分かった。こんなにも貴重なお話は、是非、教師を目指す人全てが現場に立つ前に聞くべきものであり、そして生徒一人ひとりの命の大切さをとことん考えるべきだと思った。物が豊かになった反面、人びとの心は貧しくなる一方のようにも思われる今日の不安定な社会だからこそ、1日の大半を過ごす“学校”が生徒それぞれの心の居場所となり、どこかで自分が1番になれるような場面づくりをしなくてはならないと思った。

#### A・F (教育3)

お話の中でとても印象に残った言葉があります。それは「優しさは同情の延長ではなく他の人の痛みや苦しさを理解しようとする事、そして真の優しさは苦しみや悲しみに耐えた人の上に宿る」です(言い方は変わっていると思いますが……)。阿部さんを初めて見た時、さびしそうだけれどもそれだけではないなあ、という印象をうけました。そしてお話の中でこの言葉を聞いた時、「ああ、この方は自分の大切な子供を亡くすという大きな悲し

み・苦しみと真の優しき両方を持って  
いるんだ」と思いました。生きていれ  
ば自分の子供と同じぐらいの年の私達  
を目の前に、あそこまで立派にお話す  
ことができるのは、悲しみを乗り越  
えたからではないでしょうか？ 悲し  
みを乗り越えるといっても「悲しま  
なくなる」のではないということ、阿  
部さんのお話、そして様子を見てい  
はじめて気づいたことです。阿部さん  
はきっと一生お子さんと一緒に生き  
ていくことでしょう。

これら学生たちの感想に対して、再  
び愛媛県に住む阿部ヒロ子さんから  
の手紙もよせられた。

「ちいさな風の会」の文集、お便りを  
ありがとうございます。そして何よ  
りも学生さんからの感想文、ありが  
とうございました。娘からの声に聞こ  
えます。

裁判中、よく仏前の娘に「何を言  
ってほしい?」「もう言う事はない?」  
と、声の無い娘に何度も何度も問  
いかけては法廷にのぞみました。写  
真の中の娘の目をじっとみつめ娘  
に問いかけている私は、ほんとうは  
私自身に問いかけているのだと思  
いました。声の無い娘に真正面から  
向き合う事は、自分自身に向き合  
っているのだと思しました。

学生さんの感想文を読み嬉しかった  
ことは、素直に私の気持ちを、受け  
止めて、痛みを分かろうとして下さ  
ったこ

と。そして私自身気付かなかった事  
も気付かせて下さり、ちがった自分  
に出会えさせて戴けたように思えた  
ことです。何度も何度も有難く読み  
返しました。私自身どんなに励まし  
されたことか。又生きる勇気が出  
ました。やっぱり思いきって出か  
けて、娘と同じ年頃の学生さんに  
、娘の死を語る事が出来、ほん  
とうによかったと思しました。何  
よりそんな場を与えて下さって、  
心より感謝申し上げます。早速感  
想文を仏前へ供えました。大切に  
させて戴きます。感想文をよせて  
下さいました多くの学生さん、  
風の会の方達に心よりお礼申し  
上げます。

悲しみ、弱さ、涙といったものを  
通して見えるものがあることを、  
学生たちが実感とともに受けと  
めてくれれば、と願いつつ、私  
自身が次の社会をつくっていく  
若い世代の人たちとの連関の  
なかで、「人を信じる」ことができ  
る喜びをかみしめている。

(わかやばし かずみ ジャーナリスト。  
立教大学文学研究科教育学専攻修  
士課程修了。テス・スタディに早  
くから取り組み、米国ミネソタ  
大学「死の教育と研究センター」  
に研究員として留学。現在、本  
学で「教育と福祉」「教育学演  
習」を担当し、「死」に関する講  
義やゼミを行っている。死、ホ  
スピスなどの問題に取り組み、  
子供を亡くした親の会「ちい  
さな風の会」世話人も務める。)